キャンパスアジア・報告書 (A セメスター・北京大学)

文学部 3 年 保井龍太郎

2018 年 3 月 31 日

わたしは、キャンパスアジアのプログラムで、北京大学の元培学院という由緒ある教養学部にも所属し、中国における日本研究の権威である王新生教授による『日本の歴史・文化』という講義を受講しました。100 人程度の教室は超満員でほとんどがネイティブの生徒です。現地学生の日本への関心は非常に高く、なかには日本語を話せる学生もいて、授業中の教授の問いかけに対して、日本語ですぐさま応答している授業への積極的な姿勢は、なかなか東大の授業で見られるものではなく、たいへん印象的でした。授業はもちろん中国語で行われ、おもに日本の近現代史を政治構造などから概観するものでしたが、外部の講師による特別授業も何度か開催され、とくに日本の古代の都城制など、中国と直接的に関連するテーマを、中国の研究者から学ぶ機会は、たいへん貴重で新鮮な経験だったと思います。また、日本の近現代史においても、日本の民主主義政体に特徴的な「利益誘導型」の政治について、その功罪を現地の学生に客観的に説明する講義は、日本人として高校・大学を通じて日本政治を勉強してきた自分にとっても、まったく違和感のあるものではなく、あらためて北京大学の日本研究および教育の高さを知ることとなりました。一方で、これは少しうがった見方かも知れませんが、大学における教育活動を監視する共産党への配慮なのか、限られた授業時間のなかで、日本の国会における強行採決の乱闘の場面や牛歩戦術で審議が遅延している様子を映像で見せる場面がありました。その映像をみた学生たちは、決して悪気もなく純粋に笑っていましたが、野党が与党の「強行採決」に反対してプラカードをカメラに向けながら暴力で抵抗する様子は、いかにも民主主義が戯画化された一場面であり、その光景をあえて選んで学生たちに見せることは、暗に共産党の一方独裁体制を肯定する意図があるのではないか、と邪推してしまいました。

さて、わたしがこの授業を受講した上でどうしても忘れられない出来事がありました。それは、いくつかのグループに分かれて、それぞれ日本文化についてのプレゼンテーションが課されたときでした。歌舞伎などの日本の伝統芸術からアイドルなど現代のポップカルチャーまで、各グループでテーマを自由に設定し、決められた 15 分という時間の中でパワーポイントを使いながら、クラスの前で発表するというものでした。わたしたちのグループもまた、プレゼンの 1 週間前に集まってテーマなどを話し合ったのですが、そのグループの中で日本人はわたし一人で、いろいろなアイディアに対するコメントを求められる機会は必然的に多かったです。そして、何よりも印象的だったのは、わたしが浮世絵の説明をしたとき、(それはわたしの知り得る限りの浮世絵の知識を披露したに過ぎませんが。そして、

幸運にも日本にいるときに春画展に行っていたことも説明の助けになったかも知れません。) それまでわたしを、「非常にたどたどしい中国語を話す日本人」としてしか認識していなかったであろう男子学生が、それはもう目を輝かせてわたしの話に耳を傾けていました。そして、打ち合わせが終わると彼はすぐさまわたしの所に駆け寄ってきて、わたしにこの浮世絵を知っているか、とスマートフォンの画像を見せてきました。それは森見登美彦の『夜は短し 歩けよ乙女』に出てくる浮世絵だと知っていたので、知っていると言えると、彼は非常に満足した様子でわたしにいろいろな浮世絵の話についてしてきました。それはわたしが北京大学で本当に心から通じ合えたと感じる貴重な一瞬であったことは言うまでもありません。彼とはそれから学食でよくランチをともにしたり、カフェに行くようになったりしたのもきわめて自然な成り行きでした。

留学の期間中、部屋に籠って勉強ばかりしていたわけではありません。国慶節などの休暇を利用して、現地の学生と天津に旅行に行き、租界など歴史的観光地を訪れるなど、限られた時間ではありましたが、そこでは4か月の留学期間にずっと連絡を取り合うことになる語学パートナーと知り合うことができました。彼女とはその後も五道口や王府井などの街中を散策したり、故宫博物館や七九八芸術区などの観光地にも遊びに行ったりしました。留学期間中のかなり早い段階で現地の学生とそのような気が置けない関係性を築くことができ、語学の勉強にとどまらず、中国の現代の若者の姿や文化の在り方についての理解を深めることができたことは、本当に幸運だったと思います。

さて、彼女との思い出は数えきれないほどありますが、なかでも美しい思い出は七九八芸術区で共通の趣味であるピアノを二人で弾きあったことでしょうか。普段は英語と簡単な中国語でコミュニケーションを図るのですが、彼女は北京大学の学生にはめずらしく英語が苦手で、わたしの方も中国語が流暢というわけではありませんでしたから、なかなか思っていることが伝わらず、もどかしい思いをした場面も多かったです。しかし、音楽というふたりの共通の趣味は、語学の壁を難なく乗り越えて、ふたりの心を通わせるのに十分なものでした。「共産党万歳 人民服務」と壁に書かれた、もともと工場の倉庫だった美術館の中には、仏さまがモダンに描かれた絵画がたくさん飾られていて、その部屋の真ん中にはロシアの古めかしいピアノがぼつんと置いてありました。普通、美術館のピアノは弾かせてもらえないものですが、ピアノに触れてもその場に一人しかいない係員の人はとくに注意する気配はなく、ときおりこちらに笑顔をも見せていたくらいだったので、しばらく二人でピアノを弾いていました。わたしは彼女が以前お気に入りの曲だと言っていたラフマニノフのピアノ協奏曲を彼女のために弾いてあげました。長い間調律をしていないのがすぐに分かるほどピアノの音は狂っていましたが、わたしの演奏を聴いて彼女はひどく感激してくれて、そのお返しに久石譲のピアノ曲を弾いてくれました。何とも言えない美しい時間がゆっくりと流れました。わたしは、彼女が日本人の作曲家の作品を即興で演奏できたことに驚きましたが、彼女がジブリ映画のファンであることを知って少し納得しました。

そのあと、同じ芸術区のお洒落な本屋さんに入って、芥川龍之介や東野圭吾などの日本の

小説の話をしたり、彼女が受験勉強で暗記したという漢詩をいくつか、白楽天のそれから毛沢東のそれまで、暗唱してくれたり、ちょっとした日中文化交流のようなものもしました。そして、今でも忘れられないのは、そのお洒落な本屋さんには人目につかないような暗室がひっそりと設置してあって、その中をすつとのぞいてみると、狭いせまい散らかった部屋の中で女の人が服を脱いで着替えをしているではありませんか。わたしは一瞬びっくりして訳が分からず、何か見たいいけないものを見てしまったという思いに駆られました。もう一度落ち着いて中をのぞいてみると、それは一人の女性が狭い部屋の中でテレビを見たり服を着替えたりする日常の生活の風景をただひたすら観客に見せるという、現代芸術的な映画であることが分かり、何とも面白い仕掛けだなあと思いながらも、ふたりでそんなちょっと変わった映画鑑賞をする偶然にも巡り合うことができました。それにしても、音楽や映画というものは本来言葉など必要がないのだなあ、どんな国の人でも同じように感動し涙を流せるのだなあ、あらためて感じた、そんな一日でした。

とはいえ、彼女との思い出の中で、国の政治制度の違いでわたしがひどく困惑した思い出もあります。それは、彼女との何気ない会話のなかで起きた出来事でしたが、中国人の女性が東京で殺害されたというニュースが中国国内でかなり話題となっているということを彼女から知らされたときです。詳しい内容はよく覚えていないのですが、亡くなった女性はひどく悲惨なかたちで殺され、懲役 20 年という判決が下されましたが、そうした日本の司法の判決は、「人を殺したのであれば自らの命をもって償うべき」と考える中国の人々には到底理解できるものではないらしく、彼女も少し興奮した様子で、なぜ被告人を死刑にしないのか、と日本の司法制度を非難していました。非常に頭脳明晰で日本の文化にも理解のある彼女であっても、近代の法理念への理解が全くもって欠落していることに、わたしはいささかの驚きを隠せませんでした。これから日中間の交流が活発化していくなかで、どのようにして政治制度上の決定的な差異を乗り越えていくかという課題を図らずも突き付けられた形となりました。

政治・経済体制の違いということであれば、もっともよくそれを感じたのは、11 月から 12 月にかけて急に北京の空が綺麗に澄み切るようになったことです。わたしが北京に到着した 8 月末の時期、北京の空はどんよりと曇っていて、夜の中関村の街並みは、空気中の汚染物質で乱反射した街中のネオンによって、いかにも不気味な様子でわたしたちを迎えてくれました。それが秋、冬になると、急に澄み切った空気になり、わたしは夕方の北京の凍てつくような空気を吸いながら、ランニングできるようになったものです。その変化は非常に唐突に表れ、あっという間の出来事でした。わたしが現地の学生などに聞いてみて後から知ったのは、北京郊外の住宅の暖房設備や工場における動力源が石炭から天然ガスに切り替えられたという市政府の政策転換と、「低端人口」とよばれる北京郊外の最下層市民が市政府によって強制退去させられたという現実でした。これが北京の空がきれいになったことと直接の関係があるかは不明ですが、北京の冷たく澄んだ空気を思いきり吸い込みながら、中国の政策遂行のスピード感と目的遂行の実行力を感じたことは記憶に鮮明に残って

います。

人大付中という北京屈指の中高一貫の進学校にも行く機会がありました。大学のキャンパスのような広くきれいな構内のいたるところで、英語で会話する学生を見かけました。どうやら海外の留学生の受け入れを積極的に行っているようです。また、さらに驚いたことには、重い荷物を背負った小学生のような小さな学生がいるかと思えば、もうしっかり大人の顔をした学生もいたということです。聞けば、現在中国では過剰な飛び級が社会問題になっているようです。しかし、実際に第三外国語である日本語の授業を参観して学生と交流してみると、驚くべきことに、すでに日本語を流暢に話せる学生が少なくなく、「できる学生はとことんできる」といった印象をうけ、これもこれで社会のためにも良いのではないかと個人的に思いました。さらに、数学や国語の教科書なども見せてもらいましたが、なかなかレベルが高く、中国における前期高等教育の質の高さに圧倒されました。

北京大学での4か月あまりの生活のなかで、わたしがとりわけ驚いたのは、北京大学の学生の、人目を全く気にすることなく、ただひたすら学問に打ち込む姿でした。教室をひとたび出れば、ずらっと廊下の自習スペースで学生が勉強しています。図書館に行っても、こちらが圧倒される程度に、みんなそれはもう一心不乱に勉強していました。なんてひたむきに、なんて一生懸命に勉強しているのでしょうか。わたしはその光景を一生忘れることはありません。そして、その眩暈がするような光景をはじめて目の当たりにして、(わたしは必ずしも東大の学生が不真面目で勉強不足だと言いたいわけではないのですが) これからの東アジアにおける日本の競争力について、暗澹たる気持ちになったことは言うまでもありません。逆に言えば、北京大学の優秀な学生が死に物狂いで努力している現実を確認できただけでも、今回このキャンパスアジアのプログラムに参加する意味があったと言えるでしょう。わたしは、北京大学の学生の意識の高さに圧倒され、当初やや戦意喪失してしまいましたが、これまでの学問に対するみずからの姿勢を反省し、徐々にやる気を取り戻してきました。大学の授業では教授の話す中国語を聞き取ることで精一杯で、もともと自分のよく知っている分野や入門的な内容の授業を選択していたこともあって、授業だけではみずからの知的好奇心が満たされないことがよくありました。そのような中で、自らの知的好奇心に従い、自分で図書館に行ってハンティントンやウォルトなどの国際政治学の原典に当たってみたり、マクロ経済学を勉強してピケティの『21世紀の資本』にも挑戦したりするなど、与えられるばかりでなくみずから学びを広げていく姿勢が徐々に身についていきました。それまでの日本の大学生活では、大学の授業やレポートなどに追われている感がありましたが、北京に滞在を始めてから、試験やレポートを気にするのではなく、純粹に自分の知的好奇心にもとづいて、自由に学問を追求する幸福な時間を享受できていったように思えます。それまではなかなか手につかなかった古典的作品などにもしっかりと向き合える時間と精神的余裕を確保できたことも、私の人生においてかけがえのない財産となったことは言うまでもありません。(終)